

概要

- 安足地域は、栃木県のいちご生産発祥の地で先進的な産地として発展してきたが、生産者の減少による産地規模の縮小や、農業資材の高騰による経営収支の悪化が問題。
- そこで、収益性が高い新品種「とちあいか」の導入・作付拡大と単収向上を支援するとともに、定植苗（以下リレー苗）の供給体制整備を推進。また、「環境負荷の低減」と「収益性の向上」の両立を目指し、いちご栽培におけるとちぎグリーン農業を推進。
- 令和5年産とちあいかの作付けは、令和3年産から17名、4.7ha増加。また、令和6年2月に佐野・足利地方いちごリレー苗生産協議会が設立。いちごうどんこ病に対するUV-Bの高い防除効果を実証。

具体的な成果

1 とちあいかの作付拡大と単収向上支援

とちあいかの作付けが拡大し、既存品種と比べて単収が向上

	令和3年産	令和4年産	令和5年産
戸数(戸)	23	28	40
面積(ha)	1.6	3.0	6.3
単収(t/10a) (とちおとめ比%)	5.5 (128%)	4.9 (111%)	5.0 (119%)



育苗現地検討会の様子

2 無病苗とリレー苗供給体制の整備

令和6年2月 佐野・足利地方いちごリレー苗生産協議会が設立し、
令和7年産栽培用定植苗として、生産農場4か所で23,800本の生産を開始。

3 いちご栽培におけるグリーン農業の推進

展示ほを設置し、UV-Bを照射した結果、うどんこ病に対して高い防除効果が見られることを実証。
関係機関と連携し、講習会で展示ほの成績について周知。

展示ほの成績を基にしたマニュアルを作成（令和6年3月）。1戸で新たにUV-Bを導入。

普及指導員の活動

令和3～5年	■ とちあいかの実証展示ほを設置し、品種特性や課題について検証。 ■ 作付推進のため、「とちあいか未来創りサポートチーム」の設立をJAに働きかけ。 ■ 関係機関と連携し、栽培管理等情報提供及び作付推進。
令和4～5年	■ リレー苗の供給体制について、関係機関と協議。 ■ リレー苗の需要量、生産受託希望についてアンケート調査。 ■ リレー苗生産協議会設立に向けて関係機関に働きかけ。
令和4～5年	■ とちあいかにおけるUV-B照射によるうどんこ病防除技術の実証試験を実施。 ■ 実証展示ほのデータを基に、情報提供及び導入推進。 ■ UV-B照射によるうどんこ病防除技術のマニュアルを作成。

普及指導員だからできたこと

- ・とちあいかやUV-Bの実証展示ほを設置し、そのデータを地域に迅速につなげることで品種特性や栽培管理への理解が深まり、作付拡大・導入推進につながった。
- ・リレー苗の取組について、普及員がコーディネート力を基に関係機関と連携し、理解促進と合意形成を図った。

栃木県

いちご新品种「とちあいか」の普及と生産技術の確立

活動期間：令和3年～（継続中）

1. 取組の背景

安足地域は、栃木県のいちご生産発祥の地で先進的な産地として発展してきたが、生産者の減少による産地規模の縮小や、農業資材の高騰による収益性の悪化が問題となっている。そこで、産地の生産力強化を目指し、多収で収益性の高い新品种「とちあいか」の導入・作付拡大と単収向上を支援するとともに、高齢者や新規就農者の労力軽減を目的に定植苗（以下リレー苗）の供給体制整備を推進した。また、「環境負荷の低減」と「収益性の向上」の両立を目指し、いちご栽培におけるとちぎグリーン農業を推進した。

2. 活動内容（詳細）

(1) 指導・支援の体制

各活動を推進するため、農業振興事務所は関係機関・団体との支援体制の構築や栽培技術支援を行い、市は補助事業等の活用支援、広報活動支援、JAは生産部会の活動支援、新規生産者確保の広報活動を行った。

(2) 活動経過

ア とちあいかの作付拡大と単収向上支援

実証展示はデータや栽培マニュアル等を活用し、品種特性や栽培管理方法について情報提供を行うとともに、品種を育成したいいちご研究所を視察し、生産者の作付拡大の意識醸成を図った。また、単収向上を目指し、農業振興事務所とJAで構成されている「とちあいか未来創りサポートチーム」（以下「サポートチーム」という）で生産者を個別巡回し、生育時期に合わせた栽培管理のポイントについて指導した。



育苗現地検討会の様子

イ リレー苗供給体制の整備

リレー苗供給体制の整備に向けて、リレー苗の生産受託を希望する生産者を把握するため、関係機関・団体と連携しアンケート調査を実施した。また、リレー苗生産に向けて、管内のJAに働きかけ、リレー苗生産協議会の設立を目指した。

ウ いちご栽培におけるとちぎグリーン農業の推進

「環境負荷の低減」と「収益性の向上」の両立を目指した「とちぎグリーン農業」を推進するため、国のグリーンな栽培体系転換サポート事業を活用し、とちあいかにおけるUV-B照射によるうどんこ病防除技術の実証試験を行った。

3. 具体的な成果（詳細）

(1) とちあいかの作付拡大と単収向上支援

とちあいかの多収性や耐病性等の導入のメリットや、栽培上の注意点等について理解が深まり、令和5年産生産者数40戸、作付け面積6.3haになった。また、サポートチームによる重点指導により栽培

	令和3年産	令和4年産	令和5年産
戸数(戸)	23	28	40
面積(ha)	1.6	3.0	6.3
単収(t/10a) (とちおとめ比%)	5.5 (128%)	4.9 (111%)	5.0 (119%)

技術が向上し、とちあいかは、とちおとめと比べて単収が高かった（管内JAいちご部会平均値）。

(2) リレー苗供給体制の整備

アンケートによって、リレー苗の苗需要量や生産受託希望者を把握した。令和6年2月に、生産部会・県・JA・市を構成員とした佐野・足利地方いちごリレー苗生産協議会が設立し、令和7年産定植苗として、生産農場4か所で23,800本の生産を開始した。

(3) いちご栽培におけるとちぎグリーン農業の推進

UV-Bをとちあいかに照射した結果、うどんこ病に対して高い防除効果が得られた。また、関係機関と連携し、講習会で展示ほの成績について周知した結果、UV-Bについて理解が深まるとともに、1戸でUV-Bが新規に導入された。展示ほの成績を基にしたマニュアルを作成した。



作成したマニュアル

4. 農家等からの評価・コメント

- ・とちあいかは、花芽分化が早いため定植、収穫時期も前進化でき多収性であるとともに、萎黄病にも強いので、生産者としては良い品種と感じている（足利市 S 氏）。
- ・リレー苗の取組は、高齢化に伴う産地の縮小対策や新規就農者のスムーズな定着のためにも必要な取組と考える。また、リレー苗生産受託者側としても、いちご収穫終了後の雇用維持という観点からも重要な取組である（佐野市 T 氏）。
- ・うどんこ病の防除について、UV-B 照射の効果を歴然と感ずる。UV-B 照射のは場でも、うどんこ病が発生している部分が一部ある（UV-B の波長が弱い箇所と考えられる）が、うどんこ病がそこから拡大することはないため、安心感がある（佐野市 S 氏）。

5. 普及指導員のコメント（安足農業振興事務所・主査・永嶋麻美）

いちごの生産現場では、生産者の高齢化や資材の高騰等様々な課題があるが、多収で収益性の高い「とちあいか」の導入・作付は産地を動かす「起爆剤」と感じている。「とちあいか」を作付することで収益性が上がり、後継者が就農する事例も見られる。また、産地維持や新規就農者の確保という観点からリレー苗を供給する体制作りも重要な取組である。今後も単収向上に向けた指導を行うとともに、リレー苗を供給し作付拡大を図りたい。

さらに、UV-B 照射によるうどんこ病防除技術は「環境負荷の低減」という部分だけでなく、「とちあいか」を安定して生産するためのポイントの1つと考える。様々な取組を組合せ、一人でも多くの生産者に「とちあいかを作付して良かった」と感じてもらえるよう今後も活動していきたい。

6. 現状・今後の展開等

(1) とちあいかの作付拡大と単収向上支援

新規栽培者及び栽培希望者に対し、実証展示ほデータや栽培マニュアル等を活用し、品種特性や栽培管理方法について情報提供を行うとともに、サポートチームによる個別巡回を行い、単収向上に向けた指導を継続する。

(2) リレー苗供給体制の整備

リレー苗供給体制の整備に向けては、販売価格や需要量に対する過不足が生じた場合の対処を整理することが必要である。また、需要量に応じた育苗施設を確保するため、補助事業を活用した施設整備を支援する。令和6年度からリレー苗生産が開始されることから、良質な苗生産を支援し、需要量を増加させていく。

(3) いちご栽培におけるとちぎグリーン農業の推進

いちごにおけるUV-B照射によるうどんこ病防除技術に関するマニュアルを活用し、「環境負荷の低減」と「収益性の向上」の両立を目指した「とちぎグリーン農業」の普及拡大を図る。